



目 次

にじゅうまる COP3 に参加して	1
にじゅうまる COP3 ラムサール・ネットワーク日本分科会報告	1~4
NPO 田んぼによる新たな田んぼの生きもの調査	5~7
湿地のグリーンウェイブのごあんない.....	7
水田部会からのお知らせ 他.....	8

田んぼだより第 12 号は、2 月 17・18 日、IUCN-J の主催で開催された第 3 回にじゅうまるパートナーズ会合と、同会合でのラムネット J の分科会「ひと・生きものがつなぐ田んぼ〜川〜干潟〜世界」の第一部、田んぼ 10 年に関する部分について報告します。当日発表資料等、詳しくはラムネット J 及びにじゅうまるプロジェクトの HP をご覧ください。さらに、NPO 田んぼが提唱、展開中の新たな田んぼの生きもの調査に関する記事を掲載します。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

にじゅうまるプロジェクトパートナーズ会合（にじゅうまる COP3）に参加して

中池見なつと 上野山雅子



今回、「にじゅうまる COP3」2 日目の分科会にて、中池見湿地で行っている田んぼの取り組みをご紹介させていただくことになり、この際 1 日目からフルに参加させていただきました。

今回の記念フォーラムのテーマは「ヒアリとウナギと投資から見る、私たちの生活の未来」。日々外来種の防除をし、絶滅危惧種の保全を考えている私としては、実感として生物多様性の理解や意識が浸透してきている気がしません。2010 年愛知県で開催された COP10 の後、生物多様性について世の中ではどうなっているのかきちんと知りたいと思いました。

記念フォーラムの中では、まさにタイトル通りヒアリとウナギの現状と、外来種問題・絶滅危惧種問題それぞれの対策の進まない理由、問題解決に向けての地道な研究や取り組みについてわかりやすく示され、また世界の投資事情、今や環境問題を軽視する企業には投資しないという流れについてもよく理解でき、少し希望が見えた気がしました。

しかし、世界の潮流はそうであっても、この豊かな暮らしが多様な生き物やそれを育む環境に支えられてのもの、私たちもその一部であるという意識が落とし込まれていかなければ、本当の意味での自然と共生する持続可能な社会には向かいません。そのことは、全体会合やディスカッションの中でたびたび繰り返された、「生物多様性がわかりにくい（伝えにくい）」ということとあいまって、課題の大きさを感じました。

そんな流れからの 2 日目、私が参加した第 2 分科会は、ラムネット-J が取り組む田んぼ 10 年プロジェクト、湿地のグリーンウェイブ、日韓湿地 NGO フォーラムの 3 本立てという濃いものでしたが、そこでの事例発表やディスカッションでは、田んぼを含む湿地という現場の豊かさ、何より暮らしとの距離の近さに、改めて大きな使命と責任を感じました。

稲も花を咲かせる生物、お米一粒の中にいる 7 人（諸説アリ）の神様と合わせてたくさんの生き物たちのお蔭だよと、田んぼにくる子どもやおとなたちに実感していただけるよう取り組みを続けたいと思います。



展示ポスター



生きもの元気米のお結び



全体報告会の様子



報告：にじゅうまる COP3 ラムネット J 分科会「ひと・生きものがつなぐ田んぼ～川～干潟～海」 安藤よしの

渋谷の國學院大学で開催されたにじゅうまる COP3 の 2 日目、ラムネット J はにじゅうまるプロジェクトに登録している「田んぼ 10 年プロジェクト」・「湿地のグリーンウェイブ」・「日韓 NGO 湿地フォーラム」に関する分科会を開催しました。分科会参加者は約 50 名、昼休みのカフェ田んぼには 60 名の参加があり、会場が狭く感じられるほどの賑わいでした。

■分科会第一部：「田んぼ 10 年プロジェクトの課題を解決し、2020 年以降の活動に活かすために」

愛知目標の達成年の 2020 年まであと 3 年を残すのみ、分科会第一部では、田んぼ 10 年プロジェクトを展開する中で明らかになってきた課題と、これからの活動について集まった多くの方々との意見交換・議論しました。



水田部会会長 呉地正行氏

基調報告「田んぼ 10 年プロジェクトーその活動と直面する課題ー」水田部会会長呉地正行

当プロジェクトでこれまで達成できたことと、2020 年の総括と将来の活動計画発表に向けて、今のうちに整理しておくべきいくつかの課題について報告しました。



NPO 田んぼ 船橋玲二氏

●課題 1. 「田んぼの生きもの調査の手法・データ収集・それをもとにした次のステップ」

日本各地で盛んに実施され、データの蓄積もある程度できている田んぼの生きもの調査ではあるが、田んぼの生物多様性向

上を図れたという実感がもてるところまでは行っていない。

①「新たな生きもの調査法による、田んぼの生物文化多様性の評価」 NPO 田んぼ 船橋玲二

この発表は、田んぼの生きもの調査を次のステップに進めるための提案です。今回の田んぼだよりで内容を紹介していますので、そちらをお読みください。



JA 全農 渡邊 剛志氏

②「田んぼの生きもの調査」～これまでと、これから、～

JA 全農 渡邊 剛志

JA 全農では広報 S R 活動の核として 10 年以上田んぼの生きもの調査に取り組んできています。生協・各県の JA・NPO 法人などと「田んぼの生きもの調査プロジェクト」を設立、実施しており、平成 29 年度の実施回数は 78 回、参加人数はのべ 4,200 人まで拡大してきました。また、学校の授業としての生きもの調査の実施も増えてきているとのことです。当会の田んぼ 10 年の集会には毎回、JA 全農の「さあ、はじめよう！田んぼの生きもの調査」の冊子と、クリアファイルを展示・配布しており、田んぼの生きもの調査に関する解りやすいツールとしておなじみになっています。

●課題 2. 「都市生活者は田んぼにどのようにかわれるか」都会では田んぼに行ったことすらない人も多く、田んぼの生物多様性向上の主旨を理解してもらうことは簡単ではありません。一方、持続可能な社会を創るためには、都市生活者の理解と



コープデリ 小林新治氏

行動が欠かせません。課題②では、田んぼ（生産者）と都会（消費者）をつなぐ活動をしている団体の活動を報告していただきました。

①「生産者と消費者のフードチェーンでつながる田んぼとお米と環境」 コープデリ小林新治

「佐渡トキ応援お米プロジェクト」では、佐渡のトキの保護を目的に佐渡市・JA 佐渡・コープにいがたなどと連携して協定を結び、生きものを育む田んぼ環境づくりのために、COOP にいがた佐渡コシヒカリ米 1 kg につき 1 円の寄付を行っていることや、岩手県で始まった「お米育ち豚」の普及で耕作放棄地が飼料米の田んぼとして復活するなど増えてきたこと、フードチェーン（飼料用米の生産・豚の飼育・と殺、カット・流通・加工・組合員を含む消費者）でつながっていることなどが報告されました。さらに、田んぼ 10 年プロジェクトとつながることにより、コープデリの取り組みが生物多様性条約やラムサール条約等、国際的条約の取り決めにつながる意義深いものであることを自覚したと報告しました。



河北潟湖沼研究所 番匠尚子氏

②「生きものの元気米」の取り組み」 河北潟湖沼研究所 番匠尚子

「生きものの元気米」とは、農薬の空中散布をせず、畦で農薬を使わない栽培法で管理された田んぼ一枚ごとに、河北潟湖沼研究所が生きものの調査を実施、「生きものの元気米」認証をして販売するもので、2017 年は参加農家が 7 件、田んぼ 9 枚、取扱量 6 トンで、現在の販売価格は白米 5kg 2,600 円となっています。販売は主にネットショップ、イベント、道の駅などで、農薬不使用田んぼのお米から先に売れていく特徴があります。田んぼ一枚ごとの米なので、パッケージや H P などで作られた場所・環境がわかり、田んぼの食比べもできます。これからの課題として・農家や農作業についてよりわかりやすく食べる人につたえる・農薬をなるべく使わないほうが農家自身もよくなることを実証する・取扱量のキャパ不足の改善等があげられています。

●グループ討論「2020 年以降の田んぼの活動に組み込みたい課題について」

討論に入る前に、以下の 3 氏から話題提供がありました。

①「千葉県いすみ市の取り組みと ICEBA 2018」 いすみ市農林課・房総野生生物研究所 手塚幸夫

いすみ市では水田農業の衰退を改善するために、環境と経済が両立する有機稲作にチャレンジしました。有機稲作はいすみ市生物多様性戦略の重点事業として書きこまれており、民間稲作研究所の指導を得て、生きものを育む稲作りに取り組みました。結果 2017 年には、いすみ市立小中学校全校で有機米の給食が実施できるようになりました。環境教育・食育・農業体験を一体的に扱う教育プログラム「田んぼと里山と生物多様性」を開発し実施中です。



房総野生生物研究所 手塚幸夫氏

②「びっくりドンキーの生物多様性に配慮したお米の提供への挑戦」 (株) アレフ 荒木洋美

(株) アレフは 2005 年にふゆみずたんぼプロジェクトを発足させ、2011 年に「生きもの豊かなたんぼのお米」の店舗導入を開始しました。現在全国 16 産地、719 名の生産者が総面積 1,784ha で米づくりをしています。びっくりドンキーで食事をする、省農薬米水田や生きもの豊かな田んぼが維持され、水田を中心とした地域の生きものが暮らす環境も守られるということになります。えこりん村ふゆみず田んぼでの活動は年間のべ 1,000～1,500 人が田んぼ体験をし、湿地のグリーンウェイにも毎年参加してきています。



(株) アレフ 荒木洋美氏

③「TTP（田んぼを食べる）プロジェクトで持続可能な農業を創る」 TTP 発起人 林 鷹央



TTP 発起人 林 鷹央氏

持続可能な農業と生物多様性保全の切り札として田んぼ 10 年プロジェクトに TTP を発足させました。田んぼは野草、魚、貝、カニ、昆虫など食べられるものが豊富、それらを糧（かて）として利用すること、大量生産に走らず、それぞれの地域の特性を活かした食べ方を普及することなどを実現させていきます。田んぼの生きもの調査・聞き取り調査は糧（かて）もん探しでもあります。川越市での「食べる生きもの調査」、ラムネット J 水田部会の「コナギを愛でて食べる会」などを事例として、持続可能な農業を創ることを目指して活動します。



グループ討論の様子

<グループ討論>

3 つのグループに分かれて課題 1. と課題 2. に関する活発な議論が行われました。結果的には、「生きもの調査」に関するやり取りが多かったようですが、今後もテーマ別の集会を設け、田んぼプロジェクトで活動する仲間の意見を集約してこれからの活動を組み立てていきます。多くの意見が出ていた「都市の農業を取り戻す仕組みの必要性」については以前から言われており、これも重要な活動テーマの一つになりそうです。ラムネット J では「都市の湿地」がテーマとなっているラムサール条約の COP13 で、「都市近郊の田んぼ」を取り上げることを考えています。

●お昼休みの“カフェ田んぼ”

河北潟の生きもの元気米のお結びは大好評「こんなおいしいお米は初めて」という感想が聞けました。大潟村の潟工房で作ってもらったコナギクッキーもあつという間になくなりました。民間稲作研究所の胚芽玄米せんべいも大変おいしく、栄養価も高いということです。別の分科会を開催していたコンサベーション・インターナショナルよりスタバのコーヒー、農と生きもの研究所の谷川さんよりジャム、オリザネットの若者たちよりおちゃめなイモムシクッキー、いすみ市の手塚さんより混ぜ物無しのおいしい醤油の差し入れもありました。難しい議論が多い会議の中で、食べることを通じて楽しく生物多様性保全の大切さが学べる“カフェ”の取り組みを毎回開催できればと思います。なお、カフェ田んぼの時間には、TTP 発起人の林さんによる歌も披露され、大変にぎやかなカフェとなりました。河北潟湖沼研究所・民間稲作研究所・大潟村の潟工房・農と生き物研究所・オリザネット・C I・いすみ市の手塚さん・林 鷹央さんには特にお礼を申し上げます。



カフェ田んぼ 生きもの元気米、コナギクッキー、有明海苔、緑茶



イモムシを食す様子



ランチタイムの余興
TTP 発起人の林氏による
カデモンの歌





私たちは宮城県北部の大崎市で活動しています。ガン類の越冬地、蕪栗沼での取り組みをもとに、生きものと農業が共生できる「ふゆみずたんぼ」が全国に広がるよう提案してきました。大崎では自然との共生を意識した地域の努力により、人々とガン類との距離はこの10年で確実に近くなっています。

日本の田んぼからは5,668種類の生きものが見つかっています。人が食べ物を作りながらこれほど多くの生きものと共生できる世界は、田んぼ以外には見つからないでしょう。しかし、農薬の使用や圃場整備によって生きものが住みづらくなっているのも事実です。食べ物の安全性を確保しようとの考えから、農薬を減らす、使わない、化学肥料も減らす、使わないという取り組みが長年にわたり続けられています。

NPO 法人田んぼでも宮城県北部を中心に、田んぼの生きもの調査を行ってきました。各地で農薬を減らしているはずなのに、生きものの減少傾向は止まっています。これまでの農薬や化学肥料を減らす取り組み以外にも、生きものと共生するための視点が必要なのです。そこで、私たちは農薬、土の豊かさ、風致の3つの要素について、トンボ類・アシナガグモ類・バッタ類・貝類・イトミミズ類・甲殻類・水棲甲虫類と水棲カメムシ類・魚類・カエル類の9つの種群を用いて評価する新しい方法を提案しています。3・9・4の最後の4は捕虫網を20回振るなど、9つの種群を調査する方法が4種類あることを示しています。調査では決まった調査労力（調査時間や網を振る回数を決めています）で捕まえた生きものの数を数え、それを3段階のスコアに換算して評価します。

9つの種群のスコアがわかったら、レーダーチャートに記入して視覚的に分かるように仕上げます。レーダーチャートの右上のスコアが小さければ、農薬など生きものが苦手な化学物質の影響が疑われます。下側は土の豊かさです。左上は風致、つまり田んぼとその周りの自然の連続性について評価しています。田んぼと水路のつながり、周囲の森とのつながりなど、生きものが生活しやすい空間ができあがっているかを見ています。

生きものに詳しい方からは個々の種（カエル類ではなく、ヤマアカガエルなど）をきちんと見分けないで結果がでるの？という質問がよくありますが、大丈夫です。現地で試してみると田んぼごとに違いがあることや、それぞれの田んぼの課題が見えてきます。宮城県での実践例では、5歳の男の子にも十分に理解でき、田んぼの評価ができることが確かめられています。誰

9 持続可能な農業のための9つの田んぼの指標 SUSTAINABLE AGRICULTURE 9 INDEXES FOR BIOCULTURAL DIVERSITY



にでも調べられ、田んぼの生きものがもっと住みやすくなる課題を見つけ出す方法なのです。しかも、これまで全国各地で実践されてきた田んぼの生きもの調査のやり方を応用してすぐにできます。この夏からぜひ試してみてください。

田んぼの生きもの調査3・9・4は何を目指しているのでしょうか？ 大きな狙いは本当に持続可能な田んぼの営みです。農業は生きものと共生しながら経営することで初めて持続可能な産業として成り立ちます。農薬を減らしても生きものが帰って来ないのならば、次の一手を考えなくてはいけないのですが、3・9・4を実施することでその手がかりを見つけ出すことができます。

もう一つの狙いは、有機JASに換わる認証制度の立ち上げです。田んぼの生きものが帰ってくるよう取り組みを行っている、これは国際的な目標でもある愛知目標やSDGsを達成することでもありますが、こうした努力を継続している田んぼで取れた作物を評価する「生きもの認証」産品として消費者に届けるのです。日々努力を続けていることを評価するものなので、生産者ひとりひとりを信頼する「人認証」でもあります。

地元では新しい認証制度の立ち上げに向けて動き出しています。米どころ宮城県・大崎からの新しい提案が、田んぼの生きものたちの将来を支えていくことを確信しています。

お問い合わせ先：

NPO 法人田んぼ tel:0229-39-3212

e-mail: npotambo@yahoo.co.jp



田んぼの生き物調査研修会（大崎市）

田んぼの生きものの調査3・9・4は、生きものを育む農法がどうかを評価し、持続可能な社会を実現するために開発されました。小さな子どもにも実践できるやり方ですから、この夏はぜひ試してみてください。

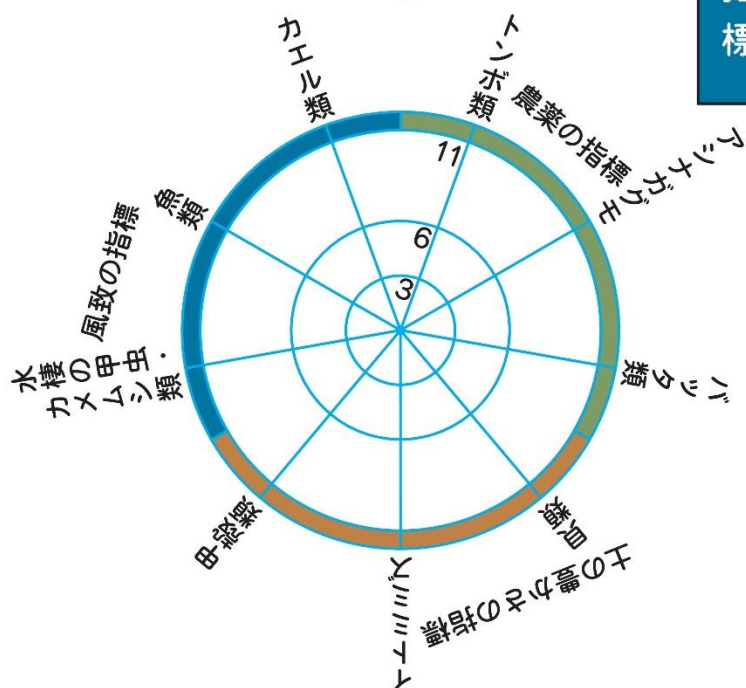


決められた時間・回数で見つけた生きものの個体数を右の表でスコアに変換します。

例：トンボが3頭見つかったらスコアは6になります。

スコアに変換したらレーダーチャートに記入します。右上の3項目が農薬など、生きものに影響する化学物質の指標、下が土の豊かさの指標、左上が風致の状態を表す指標です。スコアの高かった指標はどれでしょう？スコアの低い指標はありましたか？

個体数からスコアへの変換表					
分類	指標群	場所	スコア		
			3	6	11
農薬の指標	1 トンボ・ヤゴ	田面	0	1~4	5以上
	2 アシナカグサ	田面	0~1	2~9	10以上
	3 バッタの仲間	田面	0	1~4	5以上
土の豊かさの指標	4 貝類	田面	0	1~4	5以上
	5 イトミミズ	田面	0	1~9	10以上
	6 甲殻類	田面	0~1	2~4	5以上
風致の指標	7 水辺性・水陸カメシ	畦	0	1~2	3以上
	8 魚類	水路	0	1~2	3以上
	9 カエル類	田面	0~3	4~14	15以上



もしも、スコアが低い指標があったら改善する手立てを考えましょう。地域のみんなで議論して、生きものが今よりも住みやすくなっていくことが大切です。少しずつ、でも確実に歩んでいきましょう！

田んぼの生きものの調査3・9・4の流れ

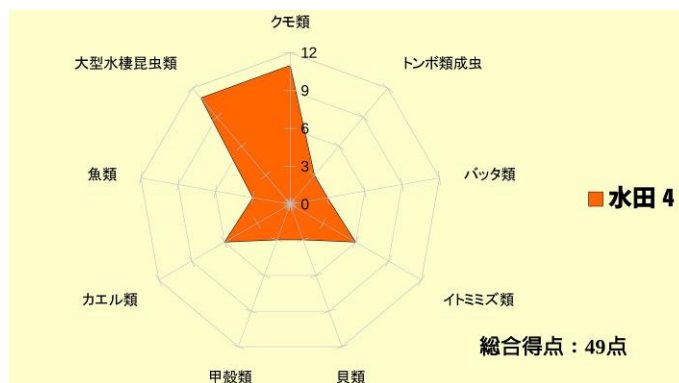
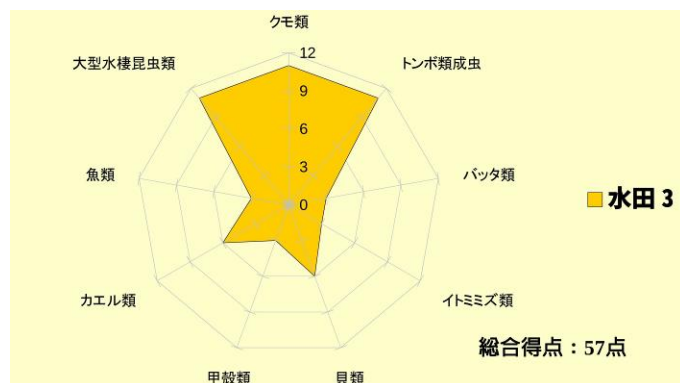
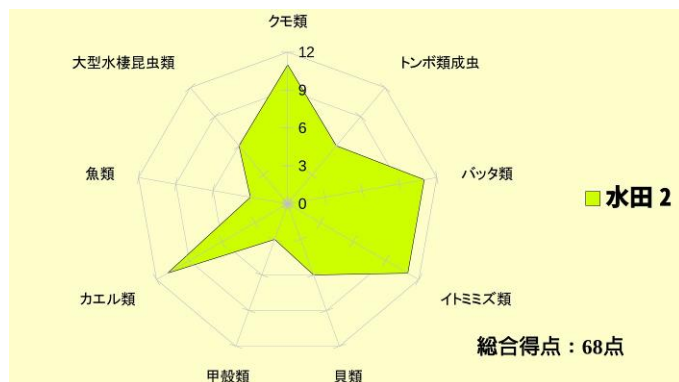
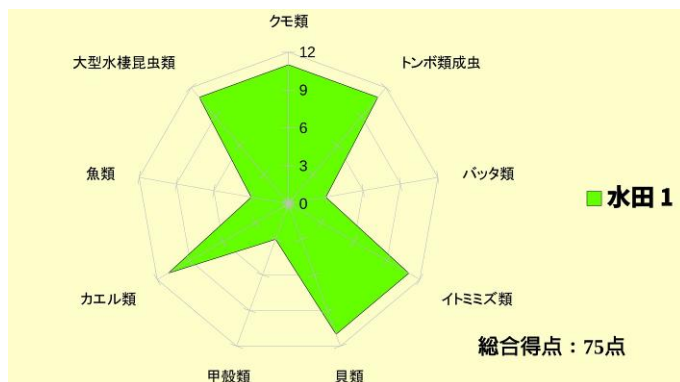


図 施肥条件の違いから生じる田んぼの生き物指標調査結果の例（大分県国東安岐町山口ヲセ）

湿地のグリーンウェイブにご参加ください

日本には、湿地の魅力を伝え、保全をアピールする取り組み（観察会・生きもの調査・田植え・学習会等）を実施している団体がたくさんあります。

ラムサール・ネットワーク日本は、そのような取組を「湿地のグリーンウェイブ」として束ねて登録し、グリーンウェイブの Web サイトやチラシなどで全国にお知らせし参加者を募るというキャンペーンを毎年実施しています。

環境省他の「グリーンウェイブ」とも連携しています。今年も国際生物多様性の日（5月22日）を中心とする4月～7月に実施されるイベント企画を募集しています。

毎年、北海道の（株）アレフのふゆみず田んぼや、石川県河北潟の田植え、福井県中池見湿地の「ミニ田んぼしよう」なども参加しています。

関心のある方は以下までご連絡ください。

Web サイト： <http://www.ramnet-j.org/gw/>

電話・FAX 03-3834-6566（ラムネット J 事務局）

e-mail : gw@ramnet-j.org



石川県河北潟の田植えの様子



（株）アレフ えごりん村のふゆみず田んぼ田植え



水田部会からのお知らせ



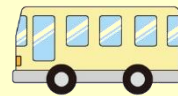
第9回田んぼの生物多様性向上 10年プロジェクト 地域交流会 in 愛知（豊田市）



- 日時：2018年6月17日（日）
- 場所：豊田市自然観察の森ネイチャーセンター（愛知県豊田市）
- 主催：NPO 法人ラムサール・ネットワーク日本
- 共催：豊田市自然観察の森
- 協力：日本野鳥の会他

第1部 田んぼめぐり 10時～12時

※マイクロバス使用（定員 20 人程度）



○生物多様性向上水田

（自然観察の森内の水田・休耕田：トンボの湿地水田、カエルの谷サシバ水田）

○矢並湿地

（水田への水供給とかつては草刈場であった、水田との絡みのあるラムサール湿地）

※環境省重要里地里山選定地域

第2部 地域交流会 13時～17時

（会場：豊田市自然観察の森N C研修室 100 人収容）

■田んぼ 10 年プロジェクト

新規登録者のご紹介

（2018 年 1 月～3 月）新規登録者なし

次号の特集：

2 月 18 日、**TTP(田んぼを食べるプロジェクト)**が
にじゅうまる COP3 で発進しました。

田んぼだより 13 号で活動を紹介します。



情報をお寄せください

皆様の活動の様子を、メーリングリスト
や田んぼだよりでご紹介ください。

田んぼ 10 年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。

また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」
などというご希望もお寄せ下さい。



MS&AD
MS&ADインシュアランスグループ

co-op
コープデリ連合会
食卓を笑顔に、地域を豊かに。

田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。

連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX:03-3834-6566



田んぼ 10 年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、
国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携推進事業に認定されています。



このニュースレターは、平成 29 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。